

死ぬための5つの準備 安心して自宅でのための5つの準備

新田國夫、安藤明著
主婦の友社
1600円+消費税



安藤さんの母親は寝たきり、父親は要介護度5だが、二人暮らしを続けている。

東京都国立市の開業医、新田國夫さんが在宅看取りがどんなにいいことかを語る。多くの人が不安に思う死について、丁寧にかんづめるように分かりやすい形式が成功している。

在宅医として20年間で1000人近い死に立ち会ってきた新田さん。豊富な事例を挙げ、説得力がある。実は、新田さんの訪問診療を9年間受けている高齢者夫婦の娘が質問者の安藤明さんだ。季刊雑誌「マイガーデン」の編集長である。

安藤さんの母親は寝たきり、父親は要介護度5だが、二人暮らしを続けている。関わってきた新田クリニックの訪問看護師も登場し、現場の細かい対応法を披露する。

書名の「5つの準備」は、①死への心づもり、②加齢による身体の変化を知る、③「病院信仰」を捨て在宅医療をかかりつけ医に頼む、④医療と介護のサービスを知る、⑤最後の2週間を幸せに生きる――。

なかでも、③の病院と自宅との違いがポイントだ。治療第一の病院医療は「20

在宅医療・在宅死の疑問、Q&Aで解説

世紀医療」とくり、QOしや幸福感を求める今の「支える医療」に合わない」と断じる。今の患者の大多数は後期高齢者だから、役割を転換しなければならぬと言おう。

では、在宅医療に病院医

療と同等のレベルがあるのか、と世間はみている。それには「医療自体は病院でも在宅でも変わらない。身体的苦痛はほぼ100%取り除ける」と明言。長年の在宅医の体験があればこそだ。この事実を「病院の医師、看護師にも見えていない」と嘆く。「そもそも1940年ごろまでの家庭用医学書には、臨終の際にはやたらと泣き喚かないように心静かに死を待ちましょう、と書かれていた」と自説は当然のことと訴える。

大進化を遂げたどじこり説明する。写真付きで商品名を挙げながら、使用法まで教える。飲んだり張ったりして「疼痛コントロール」が出るので、亡くなる直前まで旅行に行った人も」とダメを押す。

自宅死は「自然のありさまとしての死」。だから、一人暮らしを支えるヘルパーから「あら、息をしないわ」と言われて死を迎えたい、と唱える上野千鶴子説に賛意を示す。そのため「救急車を呼ばないこと」と提案する。

「脱病院死」は世界的潮流なのは間違いない。だが、医療界の意識転換が進まず、新田さんのような総合医はまだ少数派。病院側からの反論を期待したいが……。

評 浅川澄一

ジャーナリスト

元日本経済新聞 編集委員